

図書館だより

2023冬

No. 269

調布市立図書館

水木しげる氏

表紙絵

＝風呂は気持ちいい＝

表紙絵：水木しげる

- | | |
|--------------------------|-----|
| ・ 特集：私のすすめるこの一冊 | 2～5 |
| ・ 令和5年度 絵本の読み聞かせ講座 | 6 |
| ・ 出張！映画資料室 | 7 |
| ・ 第51回樟まつり | 7 |
| ・ 郷土の歴史と伝承 | 8 |

※音声版、マルチメディアDAISY版もあります。ご希望の方は図書館へお問合せください。

私のすすめる **この一冊**

皆さんからお寄せいただいた「私のすすめるこの一冊」です
今年はどんな本と出会えるでしょうか

『はじめて出会う短歌 100—短歌研究ジュニア—』

推薦者：ながおとしひろ長尾敏博

千葉聡／編 佐藤りえ／絵 短歌研究社

図書館で何気に、児童コーナーにあった本書を手にとってみた。えっ！思わず眼を見張った。これが短歌の本？万葉集から令和の現代まで100首、テーマごとに色分けがしてあり、ページにつき一首、楽しいイラストが描いてあり、手易な解説付きだ。思わず立ち読みしてしまった。これは手放しに楽しい。知っている歌はあるかとめくってみると啄木や牧水等の歌、20代に読んだ寺山修司や岸上大作もあった。ずっと意味がわからずにいた歌もあって、解説を読んでこういう意味だったのかと感心したりもした。どのページからでも読めるので全くの初心者でも手にとって楽しいだろう。圧倒的に昭和、平成の歌が多く、平成以降の歌を私はほとんど知らないが、この解説があれば大丈夫だ。あとがきには「どこにでも持ち歩きたくなる」とある。ぎっしりと歌が並べてある本より本書を持ってフラッと旅に出たいものだ。



『こんがり、パン（おいしい文藝）』

推薦者：かみえひろゆき上江博幸

津村記久子／ほか著 穂村弘／ほか著 河出書房新社

ダイエット中の私に、パンは大敵だ。“美味しい”パンは例外なく高カロリー、しかもそれを更に美味しくするバター、ジャム、ベーコン、どれも高カロリーの常連組が脇を固める…手を出すと実に危険な食べ物なのだ。

そんな私がうっかり手に取ったのは、表紙に美味しそうなトーストが描かれたこの本。食パン1つとっても、多くの食べ方があるように、40人の作家がパンを題材に、歴史・米との比較・給食の思い出・こだわりなど…あらゆる角度から攻めるエッセイ集だ。

一語一語に託されたこだわりは作者の個性とパンへの情熱となって、心地良く読者に伝わってくる。作家陣には、江國香織や外山滋比古といった、他の作品からイメージが沸く作家も多いかもしれない。そんな方へのお勧めは左上に書かれた作家の名前を見ずに読み進めること。読後の“答え合わせ”は作家の人となりを知る第2の楽しみになるに違いない。実に美味しくいただいた1冊でした。

『奇譚ルーム』

推薦者：かみえとろき上江智希

はやみねかおる／著 しきみ／画 朝日新聞出版

物語の舞台の中心は人気のSNS「ルーム」。現代の様でいて、少し昔にも少し未来にも感じる不思議な世界線。物語の扉を開けたのは、1つの謎のルームへの招待状。そのルームとは、奇譚好きの為のルーム——。

少しおかしな形で始まったルームはマörderを名乗る謎の人物の登場でデスゲームの舞台に姿を変える。生き残る条件はマörderを満足させる“奇譚”を披露すること。「ここはSNSの中だから、本当に殺されるわけがない」などという淡い期待を打ち破られ、疑心暗鬼へとおちいって行く主人公。対照的に淡々と進んでいくストーリー。全く解決せず、むしろ時間が経つ毎に増えていく謎の数々。主人公はマörderを満足させ、生き残る事ができるのか、そしてマörderの正体とその目的とは一体?!そして最後に待つ衝撃の結末。この最大の奇譚を見逃すなかれ…ッ!!

『小さい魔女』

推薦者：^{かみえあきほ}上江明穂

オトフリート・プロイスラー／作 大塚勇三／訳 ウィニー・ガイラー／画

学習研究社

私のおすすめする本は、『小さい魔女』という本です。

本の内容は、主人公の小さい魔女が、ワルプルギスの夜にまつりに行ったところ、せんぱいの魔女におこられてしまいます。そして、魔女のおかしらに「よい魔女になれ」と言われたことをきっかけに、村の人々にたくさん良いことをするという、心が温かくなるお話です。

特に私が好きな場面は、たきぎを拾いにきたおばあさんたちが木を拾えずこまっていると、魔女がこっそり魔法で風を起こして助けるところです。私はこの魔女のすばらしい行動に心が温かくなりました。

ぜひみなさんもこの本を読んで、心を温かくしてみてもいいですか。

『母の待つ里』

推薦者：^{にっただみち}新田美智

浅田次郎／著 新潮社



人生の岐路の時、ふっと立ち止まります。誰にでも故郷と言われる所はあります。又、そこは疲れた心身を癒してくれる。そして故郷の大自然、その中には母の存在が不可欠である。

この物語は岩手県のとある地方の過疎化された地での、親子（母子）の疑似体験をさせてくれます。集落全体が舞台化されていても、村人全員がキャストではあっても、個々の優しさは本物である。触れ合う人間模様に涙し、感動を受ける。ほのぼのとした気持ちになる一冊になるでしょう。

『いま政治は何をすべきか—新世紀日本の設計図—』 推薦者：^{ねづこうたろう}根津光太郎

加藤紘一／著 講談社

今は亡き政治家、加藤紘一さんの唯一にして最高の本です。

私は20代の最後の年にこの本と出会いましたが、氏の政治に対する志やビジョンが手に取るようにしてわかり、寝食を惜しんで読んだ記憶があります。

今の若い人にも、読んでもらいたい一冊です。例えば、これからの日本のあるべき姿について、氏の卓見が述べられています。

と同時に、自民党政治の反省も述べられていて、素晴らしい本なので、是非多くの人に読んでもらいたい本です。



『老後とピアノ』

推薦者：^{こつかけいこ}小塚恵子

稲垣えみ子／作 ポプラ社

新聞社を早期退職し、子どものころに習っていたピアノにもう一度チャレンジした稲垣えみ子さんのエッセイ集。

人生の後半戦！ピアノに向き合いながら格闘する著者の心のうちが軽快に語られ、その気持ちの浮き沈みに共感できる所が多々あり、思わず笑いがこみ上げる。

老化と時間との戦いの中で、他人の評価を気にすることなく、「今日一日」「この瞬間」を精一杯努力し、楽しみ、幸せを感じて生きることの大切さなど、ピアノを通して笑いを交えながら、私たちがどう生きるべきかを考えさせてくれる一冊だと思います。



『想像ラジオ』

いとうせいこう／著 河出書房新社

推薦者：原田純子 はらだじゅんこ

人が死んでゆく話です。見ていたのは海と空と鳥だけ。あとは杉の木です。高い高い木の上に、赤いヤッケがひっかかっている、喪服を着たような鳥が見つめています。

木の上にひっかかっているのはDJです。

こんなところまで津波がきたのです。

誰も気づいていない木の上から、誰かに気づいて欲しい声を町の人に届けます。

笑い有り、涙有りの人生を軽妙な語り口ですすめていきます。他の人の死にゆく声も伝えます。自分たちがどう生きて、どうなって死んでしまうのか何とか伝えたいのです。

想像力のある人にだけ聞こえてくるラジオ放送です。

彼を見守っていた鳥は、やがて飛び立ちます。まるでオーケストラの指揮者のように、尾羽根を振って導きます。西へ…西へ…。

『虫ぎらいはなおるかな？—昆虫の達人に教えを乞う—』

推薦者：上江結弥 かみえゆうや

金井 真紀／文と絵 理論社

「虫が苦手。」おそらく今日の日本人の多くが持っている意識であろう。かくいうこの本の著者も、悩める虫ぎらいの一人。本書は著者が、様々な立場で虫とかかわる人々へのインタビューを通して、虫を理解し虫ぎらいの克服を目指す過程の記録である。教育学者や虫のアーティスト、昆虫館の飼育係など、各章ごとに魅力的な語り手が登場する。「なぜ虫を嫌う人が多いのか。」各語り手によって答え方は千差万別だが、どれも読んでいてなるほど、と思わせるものばかりだ。その一方、聞き手である著者も、これらの説に感心しつつ、しかし簡単に虫ぎらいを克服したりはしない。そう、虫への恐怖は思っているより根強いのだ。そしてその葛藤をも描いているのが、この本が共感を呼ぶ理由なのである。どうせ虫ぎらいなど克服できまいと思っている方にこそ、この本を読んでほしい。必ずや、虫と人との関係性を見つめなおす際の一助となるはずである。



『動物がくれるカー教育、福祉、そして人生—』

推薦者：荒井宏祐 あらいひろすけ

大塚敦子／著 岩波書店

動物セラピーという言葉があります。日中ビジネスの世界で活躍し、帰宅後スマホなどでワンちゃんやニャンコなど好みの動物を見てストレスを癒すなどもその一つです。本書は動物セラピーの内外の現状を時に写真を交えて紹介するおすすめの一冊です。ある多摩の図書館で子どもが犬に絵本を読んで聞かせる活動をしているそうです。子どもたちは犬が喜ぶ絵本を広く探すうちに、自分の本の好みの幅が広がったり、リテラシーが深まるそうです。また、川崎市のある病院には勤務犬が常駐していて入院中の子どもたちの不安や恐怖を軽くしているそうです。病院もその効果は極めて大きいと評価しています。他に高齢者・障害者施設などでも動物が活躍しています。ところで、逆に人間の動物への福祉向上の努力はどうでしょうか。岩波ブックレットの『アニマルウェルフェアとは何か』はその厳しい現状を伝えています。両方は、一対をなすもので、同書もおすすめしたいです。

『ドイツの歴史百話』

坂井榮八郎／著 刀水書房

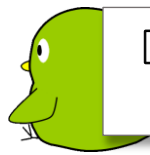
推薦者：かみえきとこ上江聡子



ドイツ史家である著者が、時代に沿って思いつくままに(?)語る、ドイツ史百話。専門的すぎず概論的すぎず、小さな発見がちりばめられている、そのバランスが素晴らしい。教育・語学・宗教・政治が玉突きに変化していく様子など、読みながら驚いたり感心したりする、発見の多い本だった。著者自身も歴史の担い手としてたびたび登場し、特に最終章では講演・執筆・映画パンフレットへの寄稿まで、八面六臂の大活躍である。

だがその数々のエピソードを超えるこの本の魅力は、各項末尾の註釈や本文の()内など、「本文より一回り小さな活字」の部分である。「この本をお借りしたまま失くしてしまった、申し訳ない」とか「地面を叩きたいくらい悔しかった」といった、素の著者が随所に顔を出す。好奇心旺盛でチャーミングな著者に肉声で話しかけられているようで、親近感を持った。

歴史の壮大さと人の縁の不思議を実感できる一冊。



『すばらしいとき—絵本との出会い—』

渡辺茂男／著 大和書房

推薦者：いのうえあきこ井上暁子

著者の渡辺茂男さんは、今なお読み継がれている数多くの児童書を翻訳され、創作作品もあり、ご存じの方も多と思う。これは、それらの本との出会いをつづったエッセイである。センダックの作品について書かれた章も面白いが、今回は『かもさんおとおり』などの著者ロバート・マックロスキー訪問記がとてすばらしいので、紹介したいと思う。メイン州の小島に住むマックロスキーの生活は絵本『海べのあさ』『すばらしいとき』そのまま、渡辺さんの素直な喜びに満ち溢れた文章を読んでいると、こちらもちやいな気持ちでいっぱいになるのだ。ちょっと内気でシャイなロバートの経験が『ゆかいなホーマーくん』に生かされたくんだりや著名なストーリーテラー、ルース・ソーヤーの娘でもあるロバートのパートナー、ペギーがニューヨーク公共図書館でアン・キャロル・ムーアのもとで働いていたというエピソードなど、名作が生まれる裏側を垣間見るおもしろさもある一冊だ。

『この父ありて—娘たちの歲月—』

梯久美子／著 文藝春秋

推薦者：どうやまかこ銅谷孝子

「私は父の最期の時を見るために、この世に生まれたのかもしれない」文中のこの言葉はこの作品の根本をつらぬいて、読む者の心をガッシリとつかんでしまっています。

父と子、母と子、それぞれの家族ごとに千差万別の生き方があるにしても、血の流れは連なってつながりは変えようが無い。

私のすすめるこの1冊の『娘たちの歲月』にはたくさんの作家が紹介されていますが、すでに読まれた本もたくさんあると思いますが、再読もまた楽しいものです。特にこの作品を書かれた梯久美子氏の作品はたくさんありますので図書館で予約なさって楽しんでください。私個人的には大好きな作家で新刊をいつも待っています。好きな作家の新刊を読むことは「生きがい」につながり人生のよこびそのものになっている90歳の現在の私です。

たくさんのご応募ありがとうございました。
お寄せいただいた原稿は、掲載の都合により一部編集させていただきました。
掲載は順不同になっておりますが、ご了承ください。



令和5年度

絵本の読み聞かせ講座



調布市立図書館では、年に1回、子どもへの読み聞かせに関心のある方を対象に連続講座を開催しています。10月に行われた今年度の講座の様子をご紹介します。

1日目



「なぜ読み聞かせが大事なのか」といった講義や、絵本の持ち方など読み聞かせのコツをお話ししました。講師による読み聞かせを聞く時間もありました。

2日目



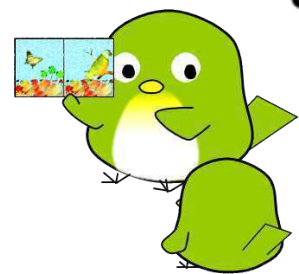
読み聞かせにおすすめの本として、40冊ほどの絵本をご紹介しました。絵本を選ぶポイントやプログラムの組み方などの説明について、受講者のみなさんは熱心にメモを取られていました。

3日目



実際のおはなし会のようにプログラムを組み、受講者のみなさんによる読み聞かせの実践を行いました。質疑応答では、「参加型の絵本を読むポイント」や「高学年向けの本の選び方」などの質問がありました。

市内各図書館で
配布しています



▲『今日のおはなしなーに?』
絵本の持ち方のポイントや、読み聞かせをする際の留意点などが載っています。



「出張！映画資料室」を開催します！



令和6年2月3日（土）から2月11日（日）まで「映画のまち調布 シネマフェスティバル2024」で「出張！映画資料室」を開催します。

今回は、令和5年11月に惜しまれながら閉所した「株式会社東京現像所」の内部に迫ります。調布の地で68年間、映画の完成と日本映画界の栄枯盛衰を見届けてきた東京現像所。閉所前に図書館で独自に記録写真撮影とインタビューを行いました。なかなか表に出ることのなかった、技術者たちの仕事を、ぜひこの機会にご覧ください！

「出張！映画資料室」展示詳細

期間：令和6年2月3日（土）～2月11日（日）

時間：10時～19時

会場：文化会館たづくり2階 南ギャラリー

費用：入場無料



前回の展示の様子

「映画のまち調布 シネマフェスティバル2024」の詳細についてはホームページをご確認ください。

第51回 調布樟まつり --- 共に生き、共に学ぶ ---

「調布樟まつり」は、図書館と生涯学習団体「アカデミー愛とびあ」の共催で開催しています。

*詳細は、市報1月20日号や図書館ホームページをご覧ください。

日時	場所	催事・講師等	
2月3日（土） 午後2時～4時	たづくり大会議場	文芸講演会	「海外文学を読む楽しみ」 翻訳者、ライター 齋藤 真理子氏
2月4日（日） 午後2時～4時	たづくり大会議場	時局講演会	「理系女子（リケジョ）が日本を変える」 毎日新聞論説委員 元村 有希子氏
2月14日（水） 午後2時～4時	たづくり大会議場	文芸講演会	「思い出の文学」 現代詩作家 荒川 洋治氏
2月15日（木） 午後1時半～4時	たづくり映像シアター	第52回 俳句大会	「選評と俳話」 太田 土男氏、權 未知子氏 高柳 克弘氏、坊城 俊樹氏
2月21日（水） 午後1時半～4時	たづくり映像シアター	第51回 短歌大会	「選評と講話」 雁部 貞夫氏、小島 ゆかり氏 松尾 祥子氏
2月23日（金） 午後2時～4時	たづくり大会議場	文芸講演会	「司馬遼太郎と『坂の上の雲』」 作家 関川 夏央氏

展示期間	場所	催事等	
2月28日（水）～ 3月4日（月） 午前10時～午後5時 （初日正午から、 最終日午後4時まで）	たづくり南ギャラリー	調布淡彩画展	（調布淡彩画の会作品発表）

月の信仰と村人の願い

関口 宣明のぶあき

明治 5 (1872) 年に暦が現在の太陽暦に改まるまでは、月の満ち欠けにもとづく太陰(月)暦が用いられ、農村では農作業の進行や豊作を神に祈る祭りも、月の形の変化にあわせて行われました。

1、調布の月見行事

きびしい自然のなかで作物の出来、不出来が暮らしを左右する農村では、五穀豊穰を月にも祈る行事が行われていました。例えば、調布に伝わるお月見では、十五夜と十三夜の月が真ん丸に見えれば麦が豊作といわれていました。

そしてこの晩には、神の使いと考えられていた子供たちは、他家で供えた団子やイモ、クリなどを自由にとって食べることも許されていました。また供えた団子を厄年の男が食べれば、厄が祓えらるるともいわれました。

このような月をめぐる行事には、豊作占い、厄除けなどのまじないを庶民にほどこしてきた修験者の影響がうかがえます。

修験者とは各地の霊山で修行する山伏のことです。



2、月待信仰を広めた修験者

月待は修験者の指導で集まった「講」という信仰を同じくする人々が、二十三日など決まった日に身を清め、月の出を待って拝む行事です。「マチ」とは古いことばで、神とともに夜を明かすことだったといわれています。

上石原にあった修験寺の聖天院(西光寺のところ)には、仏像におさめられた「月待講」の文書(万治3(1660)年6月13日の日付)が残されています。これには、女性たちが、定期的な寄り合いの際に、お金を積み立てて仏像をつくったと記されています。

旧暦(太陰暦)の6月といえば、麦の刈り入れや田植えなどの農繁期が一区切りついた頃で、レクリエーションをかねて月を祭る集まりがもたれました。修験者のまじないによれば、女性

の出産、子育ての力は、稲穂の実入りや豊作をうながすとされていました。

3、柴崎稲荷の月待塔

江戸時代には、羽黒山(山形県)などの修験者が関東地方に定住して、各地で病気治しや厄除けの祈禱をしたり、月待などの祭りを行ったりしてきました。

柴崎稲荷神社(柴崎2丁目)には「三夜塔」という二十三夜待の石塔が、文久2(1862)年初夏にたてられています。ここにはもと羽黒修験のお堂がありました。初夏とは旧暦の4月のことで、この季節に各地では山の神を田にむかえて穀物の生育が祈られました。調布でもこの頃から田植えなどの農作業が始まるにあたり、豊かな実りと村の繁栄を月に願って、この石塔がたてられたと考えられます。

このような伝統的な行事は原則として旧暦で行われてきましたが、昭和30年代の高度経済成長期をへて、都市と農村の衣食住などの生活スタイルが一様となり、そのため農村での旧暦の使用は急速に衰えました。

農村社会で月を祭っていた時代には、人々がこぞって地域の五穀豊穰を願い、暮らしに潤いを与える心の豊かさがあったといえるでしょう。

※参考文献：『調布市史民俗編』

『新編武蔵風土記稿』

「調布の文化財第15号」

刊行物番号

2023-141

図書館だより 第269号

令和5年12月25日発行 [市内印刷]

発行 調布市立図書館

〒182-0026 東京都調布市小島町2-33-1

TEL 042-441-6181

<http://www.lib.city.chofu.tokyo.jp/>